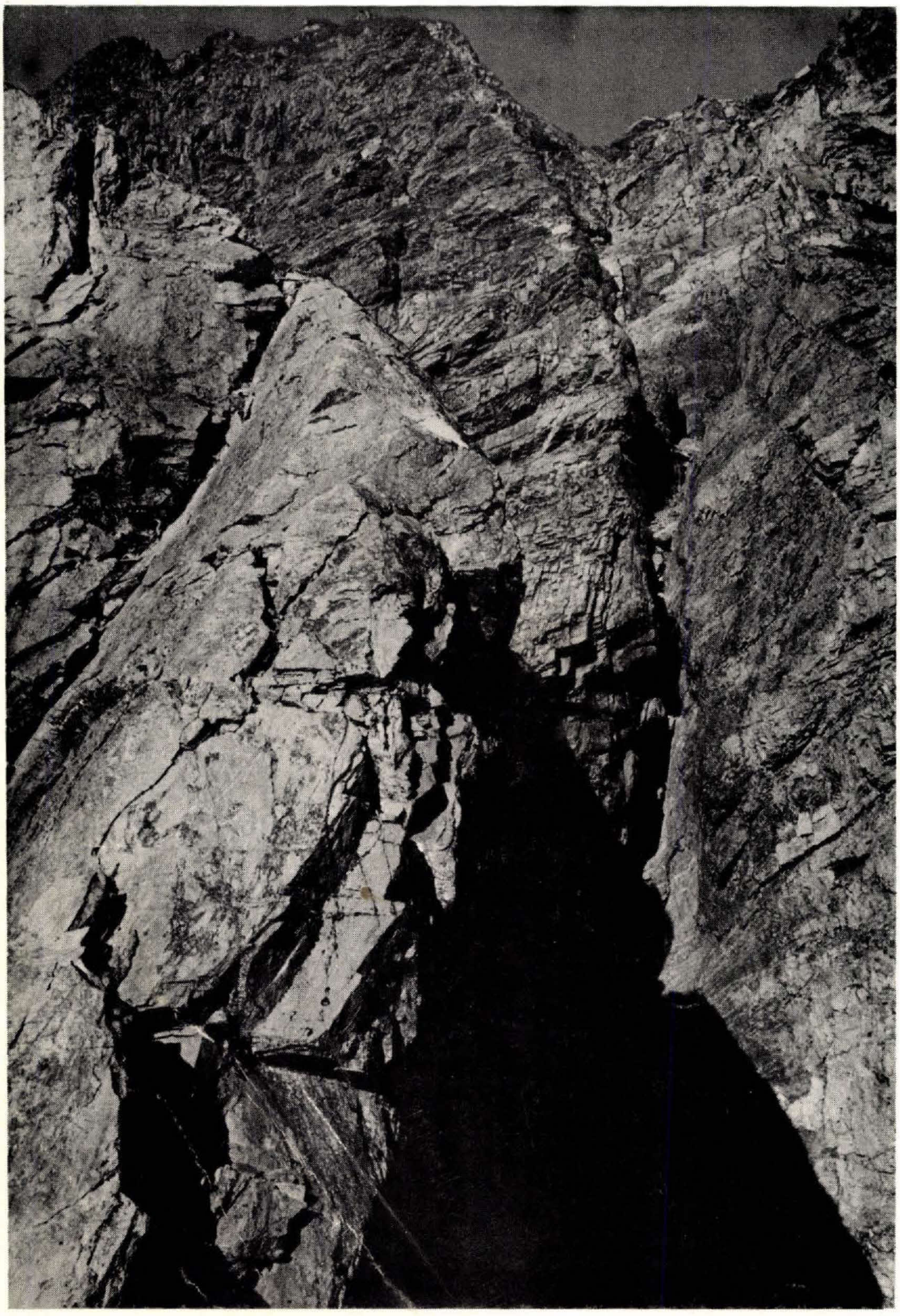
針葉樹会報

復刊46号　1976年6月



表紙写真……北岳バットレス中央稜

バットレスの岩肌は固く乾ききってまぶしいほどだった。マッチ箱の上からCガリーをのぞき込み、そして中央稜を見上げる。

巨大な胸壁に包み込まれた大気は、ある所では黒く冷たく、またある所ではまばゆく光輝に満ちていた。スラブ帯の上に小さく見える三角形のオーバーハングが懐かしい。

小さなスタンスにたち、頼りないホールドをつかみ、一瞬実現する危うい、しかし、だからこそ純粋の均衡を次々と追いかけて血が騒いだ、その場所だ。

暗いガリーにつむじ風がまく。つむじ風はフランケの枯草をちぎりとり、枯草は朝日を浴びて金色に光り、くるくると回りながら小さな青空へと舞上ってゆく。

それでは行こうか！　大樺沢の雪渓の冷気を孕んでDガリーを駆け上ってきた風が限りなく幸福な白昼夢を破った。

（写真と文・金子晴彦）

目　次

アフガニスタンの首は何故長い　吉沢　一郎…1
ブルハーン氏の裏山　金子　晴彦…2
番所集会　樋口　洪…4
サンジ小舎の一夜　久保孝一郎…5
ハヌマンティバ登頂報告(2)　前神　直樹…7
OVER 3776m　藤本　敏行…10
登頂日誌　幹事…13
会務報告　…17
一九七五年山行表

アフガニスタンの首は何故長い

吉沢一郎

ジェラルド・モーガンの書いた〝ネイ・イライアス伝〟の最終校正を終えたのが二月二七日、まだ〝解説〟のゲラが出て来ないが一応ホッとした。出版は四月の中頃となろう。それにしてもこんな長い難しい而も面倒なものをよくも途中で手もあげずにやり遂げたー訳文の良し悪しは別として——ものと自分ながら感心しているのが本心である。

英文で二九〇頁、和文の本にして四五〇頁ばかりになったが、私にはいろんな意味で大変な勉強になった。

そこで、アフガニスタンの首は何故長いか、ということになるのであるが、ここに〝首〟というのは世にいうワハン回廊のことなのである。ワハン回廊を流れるオクサス河の源流は東端のワクジール峠（四九〇七m）の付近から出ているが、この峠と東のキリク峠（四七五五m、中・パの国境上）の間に中・パ・アフガニスタンの三国境があり、そのまた北東にターグヅンバシュ・パミールの一部を距ててロシア・中国・アフガニスタンの三国境がある。

この付近で三国が国境を接しているところはこの二点以外にはない。従ってロシアとパキスタン（昔のインドの一部）とが直接接するところは一つもない。どうしてこうなったのか、それとワハン回廊がどうしてあんなに細長くパキスタンとロシアの間に挟まれながら東西に延びているのか。これらの種明し、故事来歴が今度白水社から出る〝幻の探検家〟に悉しく書いてあるのである。

それではこれで私が勉強になったのは何なのか。英国のインドにおける嘗っての官僚主義、ロシアの南進政策、プルジェワルスキー、ヤングハズバンド、カーズン、グロムチェヴスキー、……デュラの人々のやったことは？　その他諸々の人々が一体中央アジアとは？　パミール、アフガニスタン、シンキアン——パミール、カラコルム、ヒンズー・クシュ……——で何を何のためにしていたのか。考えれば考えるほど面白い。

内外を問わずいろんな本を読んでいろんなことを知るにしても結局は中央アジア研究の愛好家としてだけの自己と好奇心の満足に終ってしまうかも知れない。別にこれによって新説が出せる訳のものでもない。しかし私はそれでいゝのだと思いもするし、またそれ以上に出られるものとも思っていないのである。

（五一・二・二九記）

ブルハーン氏の裏山

金子晴彦

二泊三日でフンザに行こう。

カラチ出張が決まると僕は、いかにしてカラコルムの山々に見参するかで夢中になった。仕事はそう簡単に片付きそうもない。しかも日数は五泊六日と限られている。だからと言ってカラコルムの表玄関迄行って山影も見ずに帰られようか。

思案の揚句の旅程は超過密だった。

カラチには夜半に着く。その後二日で仕事を片付け、三日目ラワルピンディへ、更にギルギットへと飛び、そこでジープを馳りフンザへ入る。四日目フンザ谷をうろつきラカポシを眺める。五日目同じ道をカラチ迄戻り、六日目香港行の機上の人となる。こういう工合だ。

時間が無い。忙しいというこちら側の事情ばかりが考慮に入れられ、カラコルムのことは何も考えていない。ひどく独善的な旅程だ。

それでも僕はすっかり幸福で出発前から早々とフンザの夢を見たりした。

そして呆れたことに、カラチに着いた翌朝、僕は仕事相手のフセインと共に早くもラワルピンディにいた。〝仕事なんかフンザから帰ってからでよかろう〟そう言うフセインの申出を断わる理由などひとつも無かった。

しかし、さすがカラコルムは物見遊山の二人組にはそう易々とは門戸を開放しなかった。その後四日間悪天の為飛行機は姿を見せず、チトラルは完全に外部と断たれた。そして今度こそは、それ迄僕等を馳り立てていたこちら側の事情はもう何の効力も持たなくなってしまったのだ。

それでも初めの内は遥か南方のラワライ山にかかる雲の動きに一喜一憂し、明日は飛行機が来てカラチに戻れるのではないかと期待をつないだ。しかし、三日を過ぎると僕等は

らして代替地はどこか、僕等は時刻表を眺めて執拗に検討しチトラルに行こうということになった。ペシャワールから定期便が飛んだりしていささか俗っぽいが仕方あるまい。午後の便をつかまえると飛んだ。

チトラルへの道は何も彼も好調だった。ナンガパルバットやK2を北東に見ながらフレンドシップは快調に飛び、ティリチミールを見上げるチトラル川の河原にふんわりと着陸した。広大な、透徹した一帯の風物を目にした途端僕等はすっかり御機嫌になった。

しかし。ヒンズークシも甘くはなかった。その後四日間悪天の為飛行機は姿を見せず、チトラルは完全に外部と断たれた。そして今度こそは、それ迄僕等を馳り立てていたこちら側の事情はもう何の効力も持たなくなってしまったのだ。

それでも初めの内は遥か南方のラワライ山にかかる雲の動きに一喜一憂し、明日は飛行機が来てカラチに戻れるのではないかと期待をつないだ。しかし、三日を過ぎると僕等は

精根尽き果て、チトラル側の事情、これに従わざるを得なくなった。つまり、ラワライ山にひとかけらでも雲がかかれば飛行機は来ないのだ。香港では上司が腹を立てているだろう。当初は気をもんだそんなことも不思議に気にならなくなってしまった。

むしろ雲の動きに心が動揺しなくなった日の満足感の方が印象深い。

この間僕等はあのブルハーン氏に実に手厚いもてなしを受け、これがため、チトラル側の事実に誠に素直に乗り換えることが出来た。

飛行機が来ないかと飛行場で待ち呆けを食ったある日の午後、僕はブルハーン氏の裏山に登った。

館を囲む新緑のトンネルを抜けると広大でゆるやかな斜面に飛び出す。左手にゆくに従い急な斜面となり頂と呼べる高みへと連っている。

斜面の途中を水平に緑濃いティナールの並木が横切っている。その根元には小さな潅漑用水が流れているのだ。

そこから斜面はひどく急になり、放牧の羊は下から見ると宙に浮いているかと見える程だ。それにしても初春の羊はみじめにやせこけ尻の骨がぐいと突き出ている。

尚も登り下から頂と見えた所に着くと小広い台地となり、そこから本当の山頂へと長大な尾根がのびあがる。僕は両側のげっそり削られた山肌を心細い思いで辿ることになる。

しばらく行くと上からゆさゆさ何かが降りて来た。体の三倍程もある薪を背負った村人だ。みなりと言えばボロボロの部厚い布切をかぶっただけで毛脛はむき出し。足の指には何のつもりか赤い布を巻きつけてある。見知らぬ獣と呼ぶのがふさわしい。所が彼にしてみれば僕こそそうであるらしく、〝ギャッ〟と奇声をあげてやにわに僕の横をかけぬけ僕は失心しそうに驚天した。

尾根は最後の斜面に吸い込まれ、僅か乍らあった放牧の踏跡も消えた。斜面は固いアスファルトに砂をバラまいたという工合になりひどく滑り易い。それを支えてには粗らに現われ始めた柊の木しかない。刺のある葉はいやだがゼイタクは言っていられない。息を整えては次の高みの柊迄かけ登るという羽目に陥った。

手を血だらけにして、血相変えてピョンピョンやっていると突然キャッキャッと子供の声が耳をついた。こんな所で子供の声を聞くとは予想だにせず狐の子供かと周りを見回すと左手の尾根に猿の腰掛の如き小広い平地があり、そこで子供が遊んでいるのが見つかった。もう陽は西に傾き、子供達の姿は黒っぽいシルエットになってはね回っている。その向うには幾筋もの尾根が波うっている。僕は妖怪連中に見つかるのを恐れて柊の影に身を隠しながら追われるように登り続けた。

やっと辿りついた稜線からの展望は素晴しかった。

北にはティリチミールがその大地からぬきん出る所から見遥かせる。チトラルの谷からは高いきっ先しか見えないが根張りから見えるというのは登ろうという気持をかき立てて一層の美しさを山に与えるようだ。

南には深いチトラル谷をはさんで、これは白く優美な山波が相対している。雪肌にさわ

るのは澄みきった陽射しと、風と、そして低い霧でしかあるまい。日本でもずい分見たし、登ったと同じような山であり乍ら、未踏という思いがこれ又思いがけぬ美しさを与えるようであった。

ブルハーン氏の館は足元にいよいよ小さく砂漠の只中の緑の島と見える。バザールの方ではゆっくりと夕餉の煙がたなびいている。チトラルとは人為が決して自然に勝てないしかし、それだからこそ未開のままに組織だった一つの瑕瑾の無い文化圏を為して平和な所と見えた。

楽であろうと思っていた稜線伝いの下り道は途中に立派なジャンダルムがあったりしてなかなかのものだった。

ガクガクする膝と痛い脚を無理して、ブルハーン氏の館へと続く最後の斜面を馳け下るとそこにはティナールの並木の根元の流れが待っていた。

僕は埃だらけの顔と手を無理して、ブルたい水を口に含んだ。チトラルでの最高の飲物とはこの瞬間の水であったかもしれない。

水流が乱れティナールの枯葉が水底をゆっくり回転しながら流れてゆく。

僕は流れの横にアティミジアの太い根張りを枕に横たわった。

夜が来ていた。西のラワライ山の上に一番星が光る。砂漠と星とオアシスと、苛酷な自然はそれだけに実に確かな慰さめを与えてくれるようであった。

ポケットから貧弱な包装の煙草K2を出して僕は一服した。

時間が無い、忙しい、そんな事情はどこの話かね、そういう気がした。

一九七五年　五月

伊藤と申し合わせ八王子で共にあずさ二号乗車、車中彼持参キッコーマン直輸入のワインで軽く酔う。左手に北岳を一瞬望み鳳凰、甲斐駒と過ぎ、やがて右手に八ツ岳と、東京出発当時の曇天に比しよく眺められた。新島々で一時間近くバスを待合せ、鈴蘭行に乗りました。吾々二人は先づ予科時代の英語の先生で楢木沢到着は午後三時半。バス停ほんの少し戻ったところにサンジ小屋と並んで中村為治先生の所へご挨拶に伺う。予科時代より三十数年の内、丁度中間時期にサンジの交通事故による葬儀の折、先生にお目にかかりその時に在し、昔乗鞍スキー合宿の帰路鳥居尾根から番所へと滑り降りた面影は全くうせてしまった。

サンジ小屋には既に前々夜行発で乗鞍登頂降下の宮城、久保両先輩に甘利君が今しがた着いたところだといって荷物の整理中であった。吾々二人は先づ予科時代の英語の先生でありかつ岳友故サンジ君の尊父の中村為治先生にお目にかかりその時に

番所集会

樋口洪

随分御変りになったと思った。現在七十八才とは思われないお元気な姿にお目にかゝる。本日の集会者の内吾々がサンジと一番近い年代と先生に申したところ、何年違う学年だったか、サンジの仲間は酒飲みが多いが、あんた方も強いか等矢継早の質問が出る。東京手土産の菓子折と共に、昭和十八年サンジ予科この時の予科山岳部歓迎登山の黄色く色あせた記念の写真を差し出すと丁度真中に若い時代のサンジをしげしげと見入られて、これ貰ってよろしいかとなつかしげにしまわれた。

本日の集会も吾々は登頂の日程を持たなかったが、久保さんが一年越しに計画され、サンジに近い年代の参加がなくてはと伊藤と話合って参加した次第でしたが、僅かの間お独り住いの先生の居間・寝室・仕事場兼食堂の部屋で過した時間は三十余年が走馬灯の様に走り去る想いでした。先程先生から、あんたも酒飲みかと云われたのでサンジに最も親しかった予科時代同期の石井、山崎のことを想い起した。サンジと共にこの三名の当時は山行、酒行、奇行、ともに並はずれて居り吾々の近寄るところでなかったので其旨申上げたところ、先生はウンウンと苦笑の体でした。

山崎御両名の御目にとまる折は夫々納得して貰えることと思います。

こゝまで出かけて来た意義はあったなあと思いつゝ一先づ先生のお家を辞した。

夜の先生を御招きしての民宿料理の会食はまた別記されることゝ思いますので短時間ながら中味の圧縮された先生宅での一端の模様をサンジ及び為治先生を知る方々への報告をかねて記した次第です。

サンジ小舎の一夜

久保孝一郎

昨年六月、番所に初めてサンジの父君・為治先生を訪れてその存在を知ったサンジ小舎に一泊し、彼の追悼の宴を催そうと計画し、春の彼岸の連休に行うことにした。

折角の遠出だからと、宮城さんと甘利君と僕の三人はその前々夜、森脇先輩の歓迎会を済ませてから、離京した。

春の馬鹿陽気で、新宿で列車に乗り込んだ時は、シャツ一枚でも汗が出る程の暖さだが、寒の戻りで、早暁松本へ着いた頃は雪であった。

新島々からバスで鈴蘭、それよりリフト四段のりつぎ、徒歩約二時間で昼頃位ケ原山荘に着く。終日雪で、昼寝をしてから、夕方一時間程登ってスキー練習をする。夕方の雪は完全粉雪で快的であった。

翌二十日も連続雪で、僕らは登頂をあきらめ、昨日同様一時間登ってから、今夕の宴に今朝離京する樋口、伊藤両君に遅れまいと、早々に下った。昨日からの雪で、山荘・冷泉間の沢と、冷泉以下の林間の滑降は快的であったが、ゲレンデに入ってからは雪不足とア

イスバーンで不調である。

以上の経過で予定時刻の午後三時頃にはサンジ小舎に到着、間もなく後の両君もバスでやってきた。

さて、そのサンジ小舎を説明すると、木造平家建二LDKといったぐわいで、小じんまりと愛くるしい存在である。僕らは慣れぬ石油ストーブの点火にとまどったが、着火すれば快適である。その他、電気こたつ、石油バーナつき風呂、水道、電気、石油コンロ、寝具等完備している。

手数をはぶくため、食事はすべて車道向いの民宿・からまつ荘に依頼し、風呂も入れてもらった。夕方六時より為さんを迎え計六人前記民宿調理の豚鍋を囲んで飲食する。「君たちは、その気になりさえすれば、明日からでも自分の気のむくままの生活ができるはずだ」との先生の快怪気炎に僕らは当てられ、アルコールも廻り、讃治追悼の談にも花が咲いた。

さて、宴もおひらきとなり、いよいよ寝る段となって、各自布団を分配し、就床消火消灯したとたん、急に部屋は冷えこみ、しかも隙間風がひどい。最初この小舎に入って、各室を一応見廻したところ、ガラス窓は一重で、目張りをしてないのが気になったが、透明ビニール布をたらしてあるので、この節の暖冬では充分しのげるだろうと予想したのが失敗であった。やはり山小舎ともなれば、小さくても二重窓を設置すべきだ。

前夜の位ケ原山荘の暖くて眠ぐるしかったのが嘘のよう、布団を上下にしき、その中で羽毛半シュラフに包まれた僕でさえ、窓側に横臥していれば風がシュラフの中まで入り込みそうで、全身シュラフの宮城さんを除いた皆はゴソゴソ横転して熟睡に入れそうもなく、ついに早暁甘利君が起き出してストーブに点火し、ようやく隙間風による寒さは和げられた。

僕はウトウト夢うつつの脳中に、例の讃治のいたづらっぽい顔つきで「どうだ！番所の寒さは辛かろう！」と語りかける姿を描いた。

明くる二一日も小雪がちらついたり薄陽がさしたりの天気、雪道ならば白骨へ越し一してから帰京のてもあるが、アスファルト舗装むきだしの車道では歩く気も起らず、タクシーで早めに帰ってしまった。

さて今回の乗鞍山行での所感を若干付記しよう。

①山岳スキー場としては位ケ原付近は昔と同様すばらしい。ただし位ケ原山荘は三月十日前後からしか開かないようだ。

②リフト設備のゲレンデとしては、八方、蔵王等に比較し斜面が単調で劣るが、家族づれによかろう。今秋から温泉の導入もある。

③サンジ小舎も家族づれで利用させてもらえばよかろう。なお七月から弟・礼治氏の企画で、会員制の別荘ができるから、隙間風の心配ももちろんない。

④サンジ小舎にある中村清太郎画伯の乗鞍の絵は良かった。なお為さん宅にも讃次と先生の絵があるから、御見落しなく！

⑤乗鞍も開発されすぎた憾みがあるが、なお野麦峠からのルートが面白いようだ。残雪豊かな五月にゾンメルシーをかついで行きたい。

⑥三月雪の多い時に飛弾側雪のあるところまで滑り下りたい。ガイドをつければ無難、前記両山行計画につきあう御仁はいらっしゃいませんか？

⑦讃治の墓は青山墓地二種イ六号四〇側三番甲で、付近の鈴木花屋が世話している由、折あらばお参り下さい。

⑧サンジ小舎使用申込等に関する連絡先の別荘・木立山荘入会申込は讃治の次次弟中村礼治氏（蕨市塚越二ノ五ノ十、電話〇四八四ー二ー八一五九）です。

ハヌマンテイバ登頂報告 (2)

OVER 3776m

前神直樹

十七日、ソーラン・パスの途中までボッカ。易しい草尾根を辿り、尾根に岩場が出てくる手前にデポ。雨も降り出し、まだポーターにこれ以上登らせるのは危険と判断し引返す。

九月十八日、すべての装備を持ってビアスクンドを出発である。下痢のせいもあるのだろうか、食欲をそそらない米とダルはここに残しておき、これ以後の主食はチャパティというハーケンがとこいうことになる。この年のインドは雨期が長く、この山行も一日に一回は雨になる。この日の朝も夜中に降った雨のおかげでポーター達は一睡もできなかったとこぼしていた。しかし多少の雨なら動かねばならず、いくらかつらい顔をしていたがポーター達も十七日のデポ地点まで上がる。これ以上登のはまだ自覚していなかった。

翌二十日、パスを越えてしまう予定だったが、パスに着いたところで前神が多少頭痛を感じ、行程はここで打ち切ってパス泊まりとなる。夜に入って頭痛はますますひどくなり、咳も止まらずマナリ以来の下痢は直らず、その上熱まで出てくる始末である。翌日も症状

毎日そうだが雲一つない朝の青空にはすぐに雲が湧き始め、かなたに見えるインドラサンやディオティバもすぐ雲の中だ。十九日もこんな天気の中テントを進める。昨日のデポ地点（約四五〇〇mに幕営後、ソーラン・パスまで荷上げをする。正規のルートより右よりの岩の脆いところを登ったため、岩登りにあまり経験のないラムチャンはかなり消耗した様子だ。こっちを見る目付きまでがうらめしそうだ。ソーラン・パスは雪と岩しかない荒涼としたところで、ガスのためはっきり見えないが我々が進んで行かねばならない氷河はどうも広い雪原になっているらしい。雪もちらつき始めたので早々に引上げる。パスの標高は約五〇〇〇mだが高度障害らしきものはなかった。

は変らず、テントの奥で終日シュラフにもぐっている。それにひきかえ藤本は風邪も殆ど直り、元気一杯近くの小ピークに登ったりしている。二十二日の朝になっても熱は下らず、ついに下山と決定。こんなところまでしか進めないとは思いもよらなかったが、この体ではどうしようもなく、とにかく一刻も早く下りたい心境だった。最小限の荷物を持ってビアスクンドへ帰る。それほどの危険もなく下りたが、ビアスクンドへ着くと前神の気分はばかに良く、熱を計ると三十六度九分。朝は三十九度もあったのに信じられないことだ。上で高度障害と風邪とを併発したらしい。

翌朝も気分良く、それならばと再度ハヌマンティバに向うこととする。本当にロスをしてしまった。途中一泊して今度は頭痛を感じることもなくパスを越え、二十四日やっと氷河に出た。通過が困難ということもないがクレバスも出てきて、附近の景観も一変した。草木などどこにも見えず、ただ岩と雪ばかり。藤本は随分と感激しているが僕はこういう景色を好かない。前の年一度来たことのあるラムチャンはただ黙々と歩くだけ。パスをはさんで天気も一変し青空もかなり広がっている。ただハヌマンティバには雲がまとわりついて離れようとしない。三人は氷河沿いにハヌマンティバ北西稜を回り込む。ピークの南西にあたるところで幕営したのち、ハヌマンティバ南面のノーマルルートを偵察した。たいして困難な個所もなさそうだ。

二十五日ハヌマンティバの南、標高にして五〇〇〇mほどの氷河上にベースキャンプ設営。水もすぐそばを流れていて日本の冬山よりはよほど楽だ。午後にはハヌマンティバ二峰（約五五〇〇m）へ登る。最初は急な雪面となっており、次に雪稜をつめればよいのだが、五〇〇〇mを越えた山となるとさすがに息が切れる。体調の良い藤本は一人でステップを切って高度を稼ぐ。ピークに着くと、この二峰がシェルパ開業以来初めてのピークとなるラムチャンは大喜び。一人一人と抱き合う彼を見ているとあまり喜ばない僕などは人間の心がないようにさえ思える。ここから見てもハヌマンティパは割合と簡単に登れそうだ。

二十六日いよいよハヌマンティパ主峰目指してテントを後にしたが途中で吹雪となり引返す。ソーラン・パスで熱を出して以来前神は元気もなく意欲も減退しがち、それに反して体調は絶好調の藤本は、午後の晴れ間を利用してこの日三峰に一人で登ってしまった。テントの中で僕はどうしてこんなところまで来てしまったのだろうかと考えてしまう。はっきりした目的意識を持たずに出て来ただけに、山行に対する焦点も定まらない。藤本と前神の意識のずれから二人は遅くまで今後の日程や山行そのものについてまで話さねばならなった。その間ラムチャンはわかるはずもない日本語をじっと聞いてくるだけであった。

快晴となった翌朝、さあ登頂に向けて出発だ。頂上まで一〇〇〇mの標高差。日本のようにゆかなくともそれほど時間はかからないだろう。次々に現われる雪面をステップを切って進んでゆく。高度の影響だろうか、数十歩歩くたびに立ち止まらなくてはならないの

で、快調とは言い難いが、それでも徐々に高度を稼いでゆく。クレバス通過に一度使用したが、かなり疲労気味で登頂意欲も失せてただけであとはザイルを出すこともなく、一歩一歩進むだけだ。いつしかピークに近づく。しまい、結局、四峰のアイスフォールで登攀の中、右から回り込むようにピークに出てきたガスの真似ごとをやっただけだ。ラムチャンにとって十二時三十分登頂。五九二八m。やっと着いはこれも初めての体験で真剣そのものだ。写た。嬉しい。一面のガスで何も見えないが、真もたくさんとった。これをもって氷河上のビアスクンド側にはすっぱりと切れ落ち、雪生活にも終りを告げ、あとはリンゴとチョウ庇が張出ている。ラムチャンにはこれが名のチョウ（チベット人が作る日本の焼ソバそっくりの料理、たくさんの日本人が食べに来るあるピークに立った初めての経験で、「サー」とはしゃく。と店の主人は言っていた）の待つマナリへとブ、サーブ、フォト、フォトとり、ミルクテ帰るだけだ。食料も殆んど底をつき、最終日展望もきかないが皆の写真をあと寒い頂上をあてくれる。「ティーカー、ティーカー（辛い、ィーとビスケットを食べたあしかった斜面もの朝には紅茶に塩とギー（脂）を入れた飲物とにした。登りはあれほど苦。夜は肉が少し（？）をラムチャンが作ったが、とても喉を下るとなればあっという間だけてささやかな通らない。異文化とはどれほどのものか体でだけ入ったカレーの缶詰を開いう組合わせは知ることがいかに難しいかを思い知らされたお祝いだ。ダルとインド米とチャパティは感じだ。腹が空いてたまらなかった帰路、老いただけないが、このカレーをチャパティのように焼いて木の灰をまぶし羊飼いが御馳走してくれたトウモロコシの粉最高である。ただ残り少なくなった食料を前た食べ物は本当にうまかった。数日間たばこ都市スリナガルへ向い体験をしながら、にしては満腹になるほど食べることはできなを切らしていた藤本は羊飼いの水パイプをう落ち合った。い。

二十七日はテントを再びハヌマンティパの南西位置に移し、すぐ四峰登頂に向う予定だれを藤本が治療してやる。それにしても人が住んでいるわけでもないビアスクンドで年老いた羊飼いは一人どんな生活をするのだろうか。テントがあるわけでもない、粗末な服一つで雨の日など過越すのだろうか。とても真似のできることではない。

三十日にはラムチャンの故郷パルチャンに帰ってきた。夜はルグリやロキシーといった地酒を振舞ってくれ、彼の家では御馳走なだろう、次から次へといろいろな料理を出してくれる。「ティーカー、ティーカー（辛い、辛い）などといって僕らも腹一杯食う。何日振りのことだろうか。彼の家に二日ほどっかいになってからマナリに帰り、このあと我々は別れ、藤本はデリーを経てカルカッタからダージリンへ、前神はカシミールの中心都市スリナガルへ向け出発である。

これから最終目的地ビルマ、ラングーンにまだ未踏であるカ・我々はビルマの最高峰でカルポ・カジ（五八八七

m）に登頂しようと前々から計画していたが、日本ではチベットとの国境にするこの山の許可がとれず、それならば現地でとやってきたのである。三井物産や日本大使館の方々の協力を得て、ＨＩＫＩＮＧ　＆　ＭＯＵＮＴＡＩＮＥＥＲＩＮＧ　ＡＳＳＯＣＩＡＴＩＯＮのＰＲＥＳＩＤＥＮＴ・ラウン氏にお会いすることができ、話を伺ったが、現地の情勢は予想以上に厳しく、何ら実質的な交渉をできぬまま帰って来ざるをえなかった。ビルマの北部地域では戦闘が絶えず、登山には熱心と思われた大学も封鎖されたままで、もう少し治安が安定するまでは交渉の余地がないように思える。ラングーンでは様々の日本人の方にお世話になったが、ここで山岳部のＯＢ（昭和二十四年卒、森安久氏）にお合いしたのには驚いた。随分といろいろな国にＯＢがおられるものだなとあらためて感心してしまう。観光ビザは一週間しかとれないビルマを二十四日発ち、二十五日、日本へ帰ってきた。

充分とはいえない準備しかできずに出たのだが、それでも面白い経験だった。山よりもむしろその行き帰りで出会った人達の印象の方が強烈だったように思う。愛想笑いなど全く知らない風の視線にはまいったが、それだけに印象を強くしたのかもしれない。ビルマに入った時は、やっとあの凝視から逃れられたとホッとしたものだった。しかし機会があるならまた出掛けてみたいと思っている。できるならもっと高い山がある山域か、それほど人の入らないところがいい。こんな気軽な形でできたことに、ヘマは随分したものの魅力を感じている。ちなみに我々が使った金額は一人当り約三十万円、航空運賃が十九万円、滞在費、山での食料費、シェルパ、ポーターなどの賃金を含めて十一万ほどであった。なお食料は殆どを現地で購入し（山では持っていった少量の日本食の方をよく食べたが）、装備は部、その他から借りた。協力していただいたＯＢの方々にお礼申し上げます。また連絡等に不手際のあったことをお詫び致します。

登頂日誌

藤本敏行

九月二一日（霧、小雪）

小雪のちらつく朝、前神は明らかに風邪。多少、無理をしても降りて高度を下げた方が良いのか。しかし、外は非常に寒く、彼自身も一日休みたいという。初めての五〇〇〇m での休養はいかがなものかと思ったが、熱は三九度近くあるし、停滞と決定。夕方、天候は好転し、ハヌマン・ティバの北稜が見えた。上半はきれいな雪稜、下半は高度感があっておもしろそうな岩場で魅惑的だった。

九月二二日（曇のち雨）

前神の熱は依然三九度を下らず、咳も深い。昨夜は四、五回キジを打ったし、そのうち何回かは血便だったという。無念だが下ることに決め、パルチャンへ戻るため必要最小限の荷をもち出発。一四時、ビアスクンドにテントを張る。さっそく前神の熱をはかると三六

度九分、気分も良いという。一五〇〇m低所に降りたことがこの好結果を招いたのだろうか。それとも何かまた別の理由があったのだろうか。翌朝、熱がなく調子も良い場合には再度ソーラン・パスへ、と決めた。

九月二三日（雨のち雪のち曇）

前神の調子は良い。八時一五分出発。岩場にさしかかる頃より雨は雪に変わり、めっぽう寒い。ラムチャンがバテたので岩場の途中、四五〇〇m付近のデポ地点にテントを張った。

九月二四日（晴）

八時一〇分出発。ソーラン・パスで荷を回収し、反対側の氷河を下りはじめた。岩くずの下の氷、クレバスが小さいながらも氷河であることを示している。緑の草地がひろがるアルプ的景観のビアスクンドに比べ、こちら側は処々に枯れたような草がありきりの荒涼とした世界だ。天候もこの稜線を境にクル側は雲が多く、チャンバラホール側は青空に積雲が浮んでいる。ハヌマン・ティバの北西稜を大きく巻き込んで、一五〇〇m低所に降りたことがこの好結果を招いたのだろうか。それとも何かまた別の理由があったのだろうか。翌朝、熱がなく調子も良い場合には再度ソーラン・パスへ、と決めた。

九月二三日（雨のち雪のち曇）

前神の調子は良い。八時一五分出発。岩場にさしかかる頃より雨は雪に変わり、めっぽう寒い。ラムチャンがバテたので岩場の途中、四五〇〇m付近のデポ地点にテントを張った。

九月二四日（晴）

八時一〇分出発。ソーラン・パスで荷を回収し、反対側の氷河を下りはじめた。岩くずの下の氷、クレバスが小さいながらも氷河であることを示している。緑の草地がひろがるアルプ的景観のビアスクンドに比べ、こちら側は処々に枯れたような草がありきりの荒涼とした世界だ。天候もこの稜線を境にクル側は雲が多く、チャンバラホール側は青空に積雲が浮んでいる。ハヌマン・ティバの北西稜を大きく巻き込んで、一五〇〇m低所にテントを張った。

あたりの溝という溝には水流ができている。これがアフタヌーン・フラッドか、と思う。

九月二五日（晴）

ラムチャンは昨夜は寒くて眠れなかったという。昨晩の残りのカレーでブロンタ（油を使ったチャパティ）二枚を流し込んでも、外へ出る気がせず、八時漸く出発した。一〇時頃、ハヌマン・ティバめざして出発。しかし三〇分ほどで南から来た雲にすっぽりおおわれ、雪が降り出した。相当激しくなったので引き返した。一〇時頃より再び陽がさし始め、天候が回復したので、B・Cから真南に見えるハヌマン・ティバⅢと思われるピークを一人で登りに出かけた。

前神と偵察に出た。一時間半ほど、さらに氷河をつめるとハヌマン・ティバへのノーマルルートとなる南面が見えてきた。どうもハヌマン・ティバは高いばかりであまり面白そうな山ではない。むしろ前神は「そんなにまで峰の方が登りがいはあって照れていた。

この夜は前神と食い物の話ばかりしていた。αα米がそろそろ底をつきだしてきたというのに、お茶漬のりは山ほどあった。スープにして飲むととてもうまい……」とかなんとかいって

九月二六日（快晴、一時雪のち晴）

八時一五分、ハヌマン・ティバめざして出発。しかし三〇分ほどで南から来た雲にすっぽりおおわれ、雪が降り出した。相当激しくなったので引き返した。一〇時頃より再び陽がさし始め、天候が回復したので、B・Cからピークは約五五〇〇mである。取り付きまで真南に見えるハヌマン・ティバⅢと思われるピークを一人で登りに出かけた。

広い雪原を横断してコルめざして登るのだが、稜線は遠い。コル手前に五〜一〇m位の深さのヒドン・クレバスが二カ所あった。稜線直下のため雪が吹きだまったのだろう。稜線上は新雪が五〜一〇m積り、アイゼンが団子になる。左側は雪庇が危い。右手は急な雪面が谷底へと続いていた。たいした傾斜ではないが一人だと慎重になる。頂上手前五mほどの岩場で少々緊張して、一二時三〇分頂上着。B・Cから休まないで二時間だった。

夕方また雪が降り出す。

九月二七日（晴のち曇のち雪のち曇）

今日こそは、と心に決めて出発。この氷河の最高峰とあっては登らないでは気がすまない。急な斜面をただ頑張って登れば良かった。藤本、ラムチャン、前神のオーダーで進む。さすがに五五〇〇m以上は猛烈に息が切れる。殆ど四〇歩毎にひと息つかなくてはならなかった。クレバスが二カ所あったが容易に越えた。一一時半頃よりすっかりガスの中に入り、最後まで急斜面に悩まされたが、一二時四五分、五九二八mの頂上に立った。うれしかった。

南面からは丸い鈍重な感じのこの山も頂上は狭く、のぞきこむと北稜が細くガスの中に落ちこんでいた。三〇分程、写真をとったり、して過ごし、寒いので下った。下りは早い。夕方、食料を整理してみると、もう底をつきはじめていた。米やダル（豆）をうまくない、下痢をする、といってソーラン・パスに残してきたのが今になってひびいてきたのだ。チャパティをつくるためのアタ、ギーそれに砂糖がもう殆どない。これで二九日にはソーラン・パスへ戻らざるをえなくなってしまった。

九月二八日（快晴）

チャイ（紅茶）とビスケット、チャパティにジィフィーズ二袋という豪華な朝食をとった。八時半出発。Ⅳ峰の下にテントを移動し Ⅳ峰めざして一一時半頃出発した。だが休憩中に作ったお茶を飲みすぎて、僕は気持が悪くなり、何となく登高意欲が減退してきた。そこで、前神に登るのはやめにして、あのアイスフォールで氷壁登攀の練習をしないか、と提案してみた。前々から、ハヌマン・ティバ以外はさして登りたくもないといっていた前神は、一も二もなく賛成する。要するに日和ったのである。そうして午後は氷壁で遊んでいたのだが、それは全く楽しいひとときだった。完全な氷の斜面、これは最高に面白い。腕が棒になるほど堅いので、わずか二〇m登るのにも大分、時間がかかった。その間ラムチャンは、寒さに震えながら待っていてくれた。

九月二九日（晴ときどき曇）

この氷河最後の夜が明けた。いよいよおさらばだ。すきっ腹をかかえて辿る帰途、思いは様々であった。登りそこねたⅣ峰が抜群に立派に見える。ソーラン・パスは再びガスの中だった。岩場の途中、かってのデポ地まで下って泊った。

九月三〇日（雪のち曇）

とうとう砂糖もミルクもなくなり、ラムチ

ャンが塩とギー入りの紅茶（スープのようだ）を作るが、まるで飲めない。小雪の中を出発。何しろ一歩滑れば谷底行きである。雪がホールドを隠しているのには神経をつかった。

ビアスクンドで老羊飼いに不要な荷を預けた。足指にけがをしているというのでみてやると、ざっくりあいた深い傷だ。それに綿をってやり バンドエイドを張る。その上からボロ布だ。トウモロコシでできた黄色いチャパティと水煙草をふるまってくれた。二週間ぶりの煙草はうまい。

ボコボコという音が、まるで帰ろうというのでを過ぎ、パルチャン木材運搬のトラックに乗せてもらった。すごいトラックで、歩くのとたいした変わりはないが、豆のできかかった足はこれで救われた。パルチャン村のはずれでトラックを降り、さっそくチベッタンの茶店でチャイとポコーラ（玉ねぎやじゃがいもの入った天ぷら）、ゆで卵にありついた。

早々に出発し、ドンディまであと六kmという所で

今日中にパルチャンま

懇親会

三月十八日　如水会館

出席者　吉沢一郎、近藤恒雄、久保田礼治、手塚晴雄、増山清太郎、鈴木英雄、黒田正治、柿原謙一、望月達夫、森脇芳之、佐々木誠、榎本直司、大塚武、宮城恭一、佐野茂雄、山田亮三、久保孝一郎、原田豊、中島寛、大賀二郎、原博貞、俵昭、西牟田伸一

今年度は忘年会とも開いていないため、また、久し振りに米国在住の森脇氏が帰国されたのを機会に懇親会を開催した。森脇氏より米国の山登りの話など興味深い話をいろいろうかがった。

村尾金二さんを偲ぶ集い

昨年九月に亡くなった村尾さんを偲ぶ集いが、親しい山仲間によって、御遺族を招いてひらかれた。正面にペンちゃんの遺影を飾って一同黙禱、食事が終るころから、青木昇、川崎精雄、吉沢一郎、交野武一、近藤恒雄、佐藤久一朗、手塚晴雄、柿原謙一、小林重吉の諸氏が、在りし日のペンちゃんの思い出を語った。丁度出来上った針葉樹会報45号を配布し、参会者に喜ばれた。世話人（吉沢、松木、近藤、望月）司会（望月）

昭和五十一年一月二十七日　於如水会館

出席者（日本山岳会等）青木昇、佐藤久一朗、渡辺公平、交野武一、川崎精雄、折井健一、名須川浩、深田志げ子（久弥氏夫人）、川喜田はる（壮太郎氏夫人）、山田哲郎、坂本圭子、黒柳満義、横山厚夫、同康子、斉藤かつら、松木義夫、三辺夏雄、柿原和夫、高橋一郎、中塚博己

（針葉樹会）吉沢一郎、松本謙三、近藤恒

雄、同夫人、金田一郎、久保田礼治、手塚晴雄、吉沢松次郎、増山清太郎、清水達雄、鈴木英雄、黒田正治、柿原謙一、小林重吉、望月達夫、佐々木誠、榎本直司、岩崎利一、同夫人、日江井正己、佐野茂雄、山田亮三、久保孝一郎、根本大、小林茂雄、高崎利一、同夫人、中島寛、倉知敬

（村尾家）義子夫人、長男統一夫妻、長女やす子さんら四人

なお、村尾家から当日金三万円の御寄附を頂きました。厚く御礼申上げます。

（望月記）

山行予告 !!

会員諸氏となるべく多く山行を共にする機会をもちたいので、左記に予告しますから、参加希望者は世話人まで御連絡下さい。

記

◇北ア餓鬼岳・（唐沢岳）・燕岳

◇八月一三～一五日頃（調整はできます）

◇世話人・久保孝一郎　TEL 461・4760

部室再建費収支中間報告

四月三十日現在

▼収入

金田近二　（名誉会員）　五千円
。中川静子　（名誉会員）　一万五千円
吉沢一郎　（昭3）　三千円
松木謙三　（〃）　三千円
高木英二　（昭4）　三千円
近藤恒雄　（〃）　三千円
冠木伊右衛門　（〃）　三千円
高橋要二　（昭5）　三千円
宇佐見敏夫　（昭6）　三千円
。山田亮三　（〃）　三千円
久保田礼治　（〃）　五千円
手塚晴雄　（〃）　五千円
吉沢松次郎　（昭7）　三千円
清水達夫　（昭8）　七千円
鈴木英雄　（〃）　三千円
岡田謙三　（昭10）　三千円
豊田忠巍　（〃）　三千円
中島孚　（〃）　三千円
黒田正治　（昭11）　五千円
柿原謙一　（昭12）　五千円
松浦静雄　（昭13）　五千円
望月達夫　（昭14）　五千円
。森脇芳之　（〃）　一万円
佐々木誠　（昭14）　五千円
榎本直司　（昭15）　五千円
岩崎利一　（昭16）　五千円
船本文治　（〃）　五千円
日江井正己　（昭17）　五千円
宮城恭一　（〃）　五千円
深谷光茂　（〃）　五千円
佐野茂雄　（〃）　五千円
。山田亮三　（昭19）　五千円
久保孝一郎　（〃）　五千円
樫淵明　（〃）　五千円
。佐藤政雄　（昭22）　五千円
根本大　（〃）　五千円
林正敏　（〃）　五千円
高野秀男　（〃）　五千円
鈴木肇　（〃）　五千円
松下順吉　（〃）　五千円
野尻七郎　（〃）　五千円

樋口　洪（〃）五千円
山崎　拡（昭23）五千円
○大島理則（〃）五千円
○小川宣美（昭25）五千円
○佐藤　勇（〃）五千円
小泉三好（昭27）五千円
横山晥一（〃）五千円
○荒砥通虎（昭28）五千円
○須山修平（昭30）五千円
奥野巌根（昭31）五千円
高崎治郎（〃）五千円
松尾寛二（〃）五千円
○鈴木克夫（〃）五千円
○勝田有恒（昭32）四千円
○甘利仁朗（昭〃）四千円
柴崎　新（〃）四千円
○中村幸正（昭33）五千円
中村　保（〃）四千円
市畑　進（〃）四千円
西海隼雄（〃）四千円
宮川守久（〃）四千円
○茂木俊明（〃）四千円

○宇田川徳治（昭34）四千円
市川陽一（〃）四千円
渡辺嘉佑（昭35）四千円
○大橋一慶（〃）四千円
○峰高教通（〃）四千円
宮城賢三（昭35）四千円
○中島　寛（昭36）四千円
○有賀　盛（〃）四千円
石　弘光（〃）四千円
○大賀二郎（〃）四千円
小林進二（〃）四千円
○永井新也（〃）四千円
三井　博（昭37）四千円
蛭川隆夫（昭39）四千円
小野　肇（昭40）四千円
○山本溢弘（昭41）三千円
佐藤之敏（〃）三千円
○佐藤久尚（〃）三千円
中村雅明（昭43）三千円
○俵　昭（昭44）三千円
○宮武幸久（昭45）三千円
西牟田伸一（昭47）三千円

○上田　伸（昭48）三千円
計　八十五名
三十七万二、〇〇〇円

▼支出
趣意書発送費　五、〇〇〇円
渋谷工務店への支払　三三万三、七四〇円
ペンキ代　一万一、五五〇円
カーペット代　一万四、九一〇円
計　三十六万五、二〇〇円

▼残高　六、八〇〇円

消息

市川陽一（昭和三四年卒）
（勤務先）K・KACHI CO., NEW YORK, INC
2 WEST 46TH STREET NEW YORK・
N・Y・一〇〇三六 U・S・A
TEL・（二一二）五七五－八六四四
八六四五

（留守宅）〒一四五　東京都大田区田園調
布本町二一一三　市川郁子
TEL　七二二一〇九一九
小林進二（昭三六年卒）
（自宅）〒二一三　川崎市高津区土橋
一一九一一　サンビレヂ一〇三
倉知敬（昭和三八年）
（自宅）〒二八〇　千葉市真砂二一一六
一棟一一二号
TEL　〇四七二一七九一四八〇三

会費納入のお願い

五十年度も残り少なくなりました。会費未納の方は左記の方法にて納入願います。

（会　費）

。昭和一〇年卒業まで　三千円
。〃十一年～三十一年まで　五千円
。〃三十二年～四〇　年まで　四千円
。〃四十一年以降　三千円

（送金先）

◇銀行振込
三菱銀行丸の内支店　普通預金口座
No.〇〇〇二・四三八九五二〇　針葉樹会

◇郵便局振込
東京一八三四五八　針葉樹会

◇現金書留
〒一八一　三鷹市下連雀四一一四一一二
中村雅明　宛

編集後記

大変遅くなってしまいましたが、会報四六号をお届けします。

〇

前号の村尾さんの写真はすべて柿原さん撮影のものを提供いただいたものです。他の方にもいろいろご協力をいただきました。誌上をかりてお礼申し上げます。

〇

今年度より編集係が替わり次号より藤本敏行君が編集にあたることになります。当初に思っていたことをほとんど実現できずじまいで、内心忸怩たらざるをえませんが、今後は原稿をセッセと？送って、借りを返すことにいたします。編集にあたって多くの先輩にご協力をいただきました。新編集係にもより一層のご支援をお願いいたします。

（井）

1975年 山 行 表

近 藤 恒 雄

月　　日	場　　所	同 行 者	位　　象
1月	仏果山	村尾　小林（重）	
2月	伊豆大峠長者原山	村尾，小林（重），坂本	
10月	虎毛山，神宝山	望月，山田（亮），高木	
12月	伊豆万二郎岳，万三郎岳	小林（重），村尾統一，坂本	万三郎岳の三角点付近にペンちゃんの遺骨が祠ってあります。追悼登山でした。

鈴 木 英 雄

月　　日	場　　所	同 行 者	印　　象
3月16日	畦ケ丸	宮城，久保	会報43号
5月24日	那須連山	久保	〃　44号
8月28日	日光白根山	〃	〃　45号
			友人達の北海道旅行に3日間だけ参加し、その前後静かな秋の山を歩いた。天気もよく最果ての人情にも触れた山行であ

9月２２日	大雪山	単独	った。層雲峡7:３０のロープウエーに乗る。黒岳は３０mの強風で立ち止れず、石室では下山の準備をしていた。残雪は殆ど消え、北鎮岳には海老のしっぽ。阿寒知床の山を望む。裾合平のチングルマの草もみじは美事だ。勇駒別に下る。ここで友人達を待って三泊し毎日姿見池に通った。ロプ駅に愛山渓方面子連熊出没の注意報あり。 知床五湖で一行と別れ昨夜岩尾別温泉泊り。朝６：３０ガイド赤沢氏がウトロから来た。自然保護監視員の制服、民芸品店の主人である。ラウス平で７，８人に遇う。頂上は狭くシーズンには長い行列になる。夜登れば硫黄山を廻って林道に下る日帰も可能という。羅白側の岳樺の道で熊のふんの跡を見る。直径１２センチ程の黒い円形。１８：３０羅白温泉着。案内料を聞くと好きでやっているので商売に非ず、皆さん喜んでくれればそれで満足と受取らないのには困った。父上は子供の頃から北大の木下氏と山に登り、黒田初子氏の案内もしたという。翌朝彼は山越しに帰って行った。こちらはバスで斜理に移動。完全舗装の車道は所々草の茂る旧道と交叉往時を忍ぶ。半島の山々とオホーツク海に浮ぶ北方領土を眺め、やがて斜理岳の裾を廻って駅前の旅館に泊る。
9月２７日	羅白岳	ガイドA氏	６：３０タクシーで出発。江南でジャガ薯を満載したトラックの一隊を追い越し７：３０清岳荘から登る。沢を左右に渡

9月29日	斜　里　岳	単　独	りながら旧道を行く。北海道には珍しい斜理岳神社の小祠に目的を果したお礼、１２時頂上。キャッチボールができる位の広さ。逆光に光る摩周湖、クシヤロ湖、阿寒の山々、北は直線道路とオホーツク海岸線。やせ屋根を急降下して豊里口に向う。玉石の沢は人頭大の石を踏んで下る。水はなく、林の中で空も見えず。沢を右に離れると間もなく車道に出た。１６時。植林監督の営林署員に声をかけられ、ジープで旅館まで送られた。札幌の諸君にも会いたかったがいささかしんどくなったので翌日釧路から帰る。
１０月１０日	川　苔　山	久　保	川苔橋から登り獅子口へ下る。バスの都合悪く川井まで歩いた。
１２月２１日	鍋　割　山	〃	雨山峠から鎖場を越えて頂上。小雪の中で昼食。大倉へ下る。

柿原謙一

月　日	場　所	同行者	印　象
1月3日	宝　登　山	単　独	長瀞にある「宝に登る山」という名の縁起良き山へ初登りする。
1月11～12日	坂丸峠・オドケ山・西御荷	山田亮三（１２日）	坂丸峠をこえて万場町今井屋で山田氏と合流。オドケ山はよ

	鉾山		ごれていないしづかな山だった。
1月19日	秩父の御岳山	単　独	オドケ山や西御荷鉾に手をかざして打ち眺めた。
2月9～11日	御岳山スキー行	山田亮三・小林茂雄・中島寛・木村・柿原息	スキーで3,000mを狙ったが3名は7，1合目で休憩しUターン。若い3名が頂上をモノにした。歩いて登るのとスキーをかつぐのとでは、歩くのが楽らしい年令になったかネ。
3月1～2日	四阿山スキー行	山田亮三・倉知敬・柿原息	会報44号山田随筆のとおり。第3回目でこの山の頂にたてた。
3月22～23日	雲　取　山	山田亮三・柿原息・高橋・河内・後藤	快晴にて積雪を踏む。翌日は急用おこり、一行に別れ一人で秩父側に下山。一行は鴨沢へ。
4月20日	秩父の御岳山	単　独	片栗の花を眺めたくて登る。少しおそかりしもおそ咲の群落あり。
5月31日～6月1日	両　神　山	山田亮三・木村・柿原息・高橋・河内・那須	名古屋より木村哲夫氏（J・A・C）来秩するので一緒に登る。6月1日下山のとき雷雨にあう。
6月14日	黒　檜　山	単　独	会報44号拙稿どおり。ああタカサゴキララマダニというやつ！

7月19～20日	朝日岳・笠ケ岳	山田亮三・小林茂雄	昭和16年秋、ペンちゃんと宝川より登ってクマにあったコースを辿って、此度は山頂にたてた。土合への降りのイヤーな　ナガーイ道。
8月1～5日	黒部源流と薬師岳	山田亮三・木村・柿原息	若い2人のおかげで、黒部源流の赤木沢の草原に幕営できて、花・草・渓・滝・潭・星を眺め、緑と閑と静を味い、薬師頂上の展望をかせぐ。快晴つづきにて快哉。
11月2日	熊　倉　山	単　独	9月老母他界し村尾さんも逝く。傷心の身を山頂におくことしばし、村尾さんと中川さんを偲ぶ。
11月16日	秩父の御岳山	単　独	紅葉の夕映え見事にして晩節を貴ぶがごとし。ここにも村尾さんを偲ぶ山道があった。
11月23日	両　神　山	土　屋	秩父より白井差経由で頂上にたち、同じ道を下山。日帰りができることが判った。よし来年も！
12月28～29日	権兵衛峠越え	山　田　亮　三	伊那より奈良井宿へ。奈良井川ぞいの部落潰退転の状は凄涼。

望 月 達 夫

月　日	場　所	同 行 者	印　象
１２月３１日～1月３日	五社山、三体明神山、荷路夫の明神山（阿武隈）		
１月１８～１９日	御坂の大石峠		
２月２２～２３日	加波山、足尾山		
3月２日	笛吹峠、土俵山、浅間峠		
3月９日	恩若峰、源次郎岳		
3月２１～２３日	高反山、帳付山（不登）桧沢峠		
４月１２～１３日	柳沢峠、丸川峠、大菩薩岳、長峰		
４月１９～２０日	御霊櫃峠、大将旗山、額取山、高旗山		
5月３～５日	会津の丸山		
５月３１～６月１日	篭ノ登山、地蔵峠、湯ノ丸山、鳥帽子岳		

6月14～15日	後白髪山、船形山		
6月28～29日	野反湖から白砂山		
7月19～20日	野反湖－高沢山－大高山－赤石山		
8月15～20日	櫛島から千枚岳、悪沢岳		
8月30～31日	人形石、西吾妻山、西大巓		
9月13～15日	岩菅山、裏岩菅、烏帽子岳和山、		
10月9～12日	秋ノ宮温泉から虎毛山、神室山		
10月26日	臼杵山		
11月2～3日	山中湖南岸の大洞山－三国山、御正体山		
11月15～16日	大分県の両子山、久住山		
11月30日	正丸峠、刈場坂峠、様峠		

１２月２０～２１日	大地峠、矢平山、寺下峠、御牧戸山、厳道峠		

岩 崎 利 一

月　日	場　所	同 行 者	印　象
2月２３日			古美術と史蹟をめぐるインド旅行の帰途、機上にヒマラヤの雄姿を眺めて感激しました。そのときの二首 きさらぎの　二十三日正七時 デリー上空　陽は今昇る ローツ ェなる　山の名負へる機なればぞ エベレスト峰　さやかにも見ゆ
５月１９～２１日			鳥甲山を目指しましたが、雨降りで、秋山郷の新緑を満喫して帰 ってきました（朝日秘湯の会）
6月6日			山中湖あざみが丘の山荘から、店の若い人２人と御正体山を往復しました。頂上直下のつつじがまことに豪華でした。
9月１７日			前日、勝沼経由小淵沢の奥の山中にある友人・長田氏の山荘に一泊。１７日朝から八ケ岳横断道路から美しの森に行き、少し歩いてから、内山峠を越え富岡に出て東松山経由帰京。

			小生としては初めての長い運転でした。長田山荘から、中央に富士山、右に地蔵岳のオベリスク、左に金峰山の五丈岩、背後に八ケ岳が見えるその大観は素晴しいものでした。（家内同行）

宮 城 恭 一

月　日	場　所	同 行 者	印　象
3月15日	大野山－湯本平	4 名	「孫さんの追悼会」
16日	畦 ケ 丸	鈴木、久保	
4月26～27日	三峰－雲取－七つ石山	ひとり	
5月16－17日	西沢渓谷	ひとり	黒金山－乾徳山へ行く予定であったが雨で断念、山菜料理で下痢する。
6月13～14日	丸川峠－大菩薩嶺－丹波山村	ひとり	
7月18～19日	木曽駒ケ岳	他一名	
8月6～8日	木曽御岳山	ひとり	

8月30～31日	三条の湯－飛竜	ひとり	わかし湯だが山小舎の湯らしい風情あり。二度入ったがぬるくて閉口した。飛竜は展望がきかないのが残念。
9月12～14日	白　馬　岳	ひとり	白馬山荘の個室で一人でちびりちびりやる。白馬鑓への縦走は天気が良く、立山は勿論穂高まで見えて素晴しい。鑓温泉の３００m位上方で左足を捻挫する。しまったと思ったが足をひきづって温泉へ入り、メンソレを塗って、歩き出す。猿倉バス停まで3時間の行程を倍の6時間かけて足をかばいながら下る。夜行列車で家にたどりついたときはひざから下がはれ上っていた。早速医者に行く。入院しろと言われたが仕事上こまると言って松葉杖をかりた。幸い骨は何ともなかったが、全治２ケ月かかる。
11月30日	大山－広沢寺	ひとり	足がなおって始めの足ならし。
12月13日	大菩薩峠	ひとり	黒川鶏冠山へ行くつもりであったが、雪で柳沢峠行のバスが運休のため、大菩薩へ登る。雪が３０cmつもっていた。朝5時頃の中央線の電車で高尾まで行き高尾発の通勤列車で8:00の塩山着、それでないと柳沢峠へのバスはない。新宿から高尾までの電車が各駅停車で寒いこと寒いこと。これが一番つらかった。

山 田 亮 三

月　日	場　所	同 行 者	印　象
1月11～12日	オドケ山	柿原謙一	万場の今井屋2,500円は安いがトリ鍋は貧弱になった。
2月9～11日	木曽御岳山	柿原（謙）同和夫、小林茂雄、中島寛、木村哲夫	青壮年3人は登頂、ロートル3人は七合上で山を眺め、満足して下る。
3月1～3日	四阿山	柿原父子、倉知敬	菅平スキーでなく四阿山と書ける嬉しさよ、会報44号。
3月7～10日	志賀高原スキー	他に2人	志賀にくるとスキーが上手になったような気がするのが不思議だ。
3月22～23日	雲取山	柿原父子、高橋明子、河内リエ子、後藤章子	これで5回目だが、3月の雲取ははじめて。
4月4～5日	乗鞍岳	木村、柿原（和）那須美智	肩では烈風物凄く、登頂を断念。
4月28日	立山スキー	柿原（和）他に一人	タンボ平でひと滑りのあと、乗物で室堂へ、一の越の黒部側を滑って東一の越へ、そこから再びタンボ平に滑り込む、立山春スキーの楽しさ。

5月2日	針ノ木岳	ひとり	春の鹿島槍を眺めつつくゆらすタバコのうまさよ。
5月24～25日	至　仏　山	小林（茂）、高橋、河内	山の鼻に幕営、帰りは富士見峠、意外に雪が多い。
5月31日～6月1日	両　神　山	木村、柿原父子、高橋、那須、河内	名古屋の木村君の歓迎登山、白井差の小舎感じ良し。
6月28～30日	秋田駒ケ岳	他に2人	乳頭山の花を期待して再訪したが悪天、国見口から駒を越えただけ。
7月12～14日	焼石岳・経塚山	那須、河内、後藤	2泊3日の天幕の旅、花が少ないので失望。
7月19～20日	朝日岳、白毛門山	柿原（謙）、小林（茂）	宝川は水のキレイな谷だ、広河原の幕営も快適。
8月10～5日	赤木平幕営生活	柿原父子、木村	大快晴の5日間、黒部源流の美しい自然を十二分にタンノウする。
8月8～10日	黒部川東沢	柿原（和）	久恋の東沢の水の甘さとビバークの快適さ、長く思い出に残る旅。
9月20～21日	桧　尾　岳	倉知	桧尾避難小舎の朝は烈風と濃いガス、空木岳をあきらめてそのまま尾根を下る。

１０月１０～１１日	虎　毛　山	近藤恒雄、望月達夫 他に１人	久しぶりに両先輩のオトモをする、良い山だった。
１２月２９～３０日	権兵衛峠	柿原（謙）	峠から奈良井に至る街道１１キロの荒涼たる風景。
〔追記〕ほかに日帰りで、鹿島国際スキー、遠見スキー、黒川鶏冠山、小楢山など。この年の痛恨事は村尾さんの亡くなられたことであった。 秋以降の山行の激減の一半の原因はそのショックにある。			

久保孝一郎

月　日	場　所	同行者	印　象
1月１～４日	会津針生	ＯＭＣ	昨年末からの冬天スキー訓練合宿の継続
1月１３～１５日	白馬黒菱	ＪＡＣ	懇親スキー会、酒豊富楽し、成城ＯＢに再会二度目の登頂
1月３１日～２月２日	根　子　岳	ＯＭＣ	キビガラ避難小舎泊、救助訓練、雪少し
２月８～９日	裏　丹　沢	ＯＭＣ	２０日の大雪で、多数参加により登頂可能
２月２３日	大谷ケ丸	ＯＭＣ	Ｙ中村君の息２名の子連れ登山、子連れられ下山
３月１～２日	根　子　岳	Ｙ中息２	会報４３号参照

3月15～16日	大野山他	会員多数	〃
3月21～23日	吾妻連峰	OMC	和田小舎泊、神楽峰、雁ケ崎、木曽屋敷、祓川、大杉岳、燧ケ丘、沼山峠、鳩待通りを滑降
4月4～6日	苗場雁ケ峰	OMC	会報44号参照
5月2～5日	尾　瀬	OMC	札掛から一ノ沢峠を経て物見峠をこし煤ケ谷針葉樹林相よく
5月23～24日	那須三本槍	鈴木（英）	近郊の穴場
6月1日	丹沢一ノ沢峠	妻他	会報44号“サンジ小舎”参照
6月8～9日	乗鞍スキー	甘利	丹沢勘七沢の右側の滝の連続した面白い沢
7月20日	小草平沢	OMC	若い友人に沢歩きの案内を頼まれ二度め
7月27日	勘七沢	他2名	盛夏でも涼しかった
8月10日	海沢	他1名	会報45号参照
8月23～24日	日光白根山	鈴木（英）	東京からレンタカー往復、初日バテました
9月5～8日	荒川・赤石岳	OMC	早戸川観光センター泊、不便だけに汚れてない
9月28日	原小舎沢	OMC	
10月10日	川　苔　山	鈴木（英）	北海道の山で鍛えた鈴木さんの健脚に驚いた

１０月１６～１７日	吾妻連峰	O氏	浄土平から歩きだし、西吾妻山まで縦走の予定が、前日の雪が暖気で雨の如く落ち、姥湯に下る。月明下の露天風呂絶佳。峠小舎一泊、清水へ下る紅葉狩り山行
１０月２５～２６日	蓬　　峠	OMC	会報４５号参照
１１月１５～１６日	徳 本 峠	他３名	〃　　、今シーズンの初雪、寒かった。快晴で頂上より東京湾の船が見えた
１１月２２～２３日	鼻 曲 山	他２名	丹沢の雨山峠を経て鍋割山へ。雪に降られてささやかな、しみじみとした忘年山行でした
１１月３０日	塔 ケ 岳	ひとり	会報４６号参照
１２月２１日	雨 山 峠	鈴木（英）	（この他大山には４回ぐらい行った）
１２月３１～	上 高 地	K 氏	

針 葉 樹 会 報　　復刊第46号

発行日　　１９７６年　　６月

発行人　　針葉樹会　　会長　望月達夫

編集人　　井草長雄

〒186 国立市北 1−1−1　関方

印刷所　　国会印刷